

埼玉育ちのグローバル人

ドミニカっ子と過ごした2年間

第2回「バリオマスターになろう！」

(生活・治安編)

青年海外協力隊 2016年度2次隊 長江 茉莉子



埼玉県マスコット「コバトン」



タイトルを見ると「バリオマスターって何？」という疑問が浮かぶと思います。

バリオ (Barrio) とは、ドミニカ共和国では貧困地域を意味します。私の活動はサンティアゴ市内 8 カ所にある児童福祉施設を巡回するのですが、施設のほとんどがバリオにあります。安全第一で単独巡回するには、いくつかの課題をクリアしなければなりませんでした。

課題①「治安」

バリオは貧困地域という事だけでなく、治安もあまり良くない地域でもあります。私自身は危険な目に遭いませんでしたが、ある日の朝バリオの施設に行くとスタッフが怒っていました。室内を見てみると食堂のドアがバールで壊され、新品のコンロがなくなっていました。夜間に泥棒が入ったとの事で、スタッフが本部と警察に連絡していました。結局、犯人は捕まりませんでした。



強盗に破壊されたドア (この施設は2年間で2回の空き巣被害がありました。)

課題②「移動手段」

活動当初はグアグア (乗り合いバス) を利用して巡回していました。しかし、グアグアで行ける施設は少なく、コンチョ (乗り合いタクシー) も危険な為利用できないという事で、タクシーを利用する事になりました。

一度でもひったくり等のトラブルに遭うと、その地域での活動ができなくなるという JICA のルールがあるため、活動が続けられるように、そして何より自分の身の安全を優先し、行動していました。

解決方法①地域の人々と「アミーゴ (友達)」になろう！

バリオを巡回していて気づいたのが、地域の人々の絆の強さです。私も施設で活動をして子ども達や保護者達と親しくなると、次第に地域の人々からも笑顔で話しかけられるようになりました。とあるスタッフは、地域のバイクタクシーや商店に集まる人々の所へ私を連れていき、「マリは子ども達に図工や勉強を教えているの。良い子だから何かあったら助けてあげてね。」と皆に声を掛けてくれました。すると「俺たちの子どもの先生か！分かった。任せてくれよ！」と笑顔で応えてくれました。それからは地域のイベントを手伝ったり、家に遊びに行っ一緒に食事をしたりして、バリオに沢山のアミーゴができました。

「マリは私たちの友達、家族だから。」と活動でバリオ内の施設へ行くと、最新の治安

情報を教えてくれたり、私と一緒に行動して守ってくれたりしました。



バリオの子ども達(特に危険な地域にある施設は、柵や有刺鉄線などで囲まれています。)

解決方法②学生になりきろう (笑)

ドミニカ共和国では「外国人＝お金持ち」というイメージがあります。特に日本人はお金持ちのイメージが強く、狙われやすい存在です。日本人が珍しいドミニカ共和国、ピアスやネックレス等オシャレをしている日本人は特に目立ちます。その為、私は活動の時にはポロシャツ又はTシャツにジーンズ、スニーカーにリュックという地元の学生と似たような服装をしていました。日本人は見た目よりも若く見えるので、高校生や大学生に間違われることもしばしば。でも、若く見られてちょっと嬉しかったです♪

解決方法③信頼できる相棒(運転手)を見つけよう！

タクシーだから必ずしも安全というわけではありません。というのも、活動先の児童福祉施設はバリオ内でも入り組んだ場所にある事が多いので、タクシーの運転手が道に迷う事もよくありました。中には運転手が途中で諦めて、見知らぬ場所で「ここで降りて」と言われたこともありました。(断固拒否して地元住民の力を借りて、目的地に何とかたどり着きました！)

その為、バリオに行く時は信頼できる運転手に送ってもらうのが大切です。私も活動を通して信頼できる運転手に出会い、遠方のバリオに行く時は相棒と一緒に行了きました。

国内でも同じですが、特に海外へ行ったら「自分の身は自分で守る」が鉄則です。でも、

一人で身を守るには限界があります。現地の人々と交流して絆を深める。お互いに助け合う「アミーゴ」の精神が安全にそして楽しく海外で生活、活動する上では大切だと身をもって経験しました。こうして2年間危険な目に遭うことなく無事活動した私を見て、ドミニカ人の友人達から「バリオマスター」と呼ばれるようになったのでした。



「同じ釜の飯を食う」と心の距離も縮まる